
へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

悠久剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

【Nコード】

N9141X

【作者名】

悠久剣士

【あらすじ】

幼馴染のフェルミは「私と契約してください」と、剣士アルの『鎧』として冒険に旅立つことを望んでいた。異世界『ウェディング』では、未婚の女性たちが、契約者と呼ばれる刻印を持つ者の武器や鎧となって、モンスターと戦っている。騎士の血統を継ぐフェルミは、剣士アルに勿体ない凄い『鎧』だった。軽防具での戦闘を得意とする剣士アルは、幼馴染の願いを聞きいれて契約を交してしまっただ…。

物語の舞台となる『ウェディング』では、男が契約者となり、女の

子たちが武器や防具になって、モンスターと戦います。当然、回を重ねる毎に主人公の装備は、充実してくるのでハーレム展開が予想されます。主人公はチートではありませんが、装備される女の子たちがチート級の凄さ（可愛さ）で補ってくれると思います。基本的に、装備その他の描写がエロいと思いますのでR15指定とさせていただきます。

私と契約してください

「私は、凄い『鎧』なんだから・・・」

幼馴染のフェルミは、冒険に出ることに二の足を踏んでいた俺に、契約を申し込んできた。返事に窮する俺に「私と契約してください」と、再び申し込んできたのは、16歳の誕生日を迎える一カ月前のことだった。

求める者アルフレッド・S W・ライダー、汝は守りし者フェルミ・A r・オシリスのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？

これは、愛し合う男女が神に誓う、永遠の愛の言葉であり、愛する者に誓う愛の言葉だ。そして俺が16歳の誕生日に、幼馴染のフェルミ・A r・オシリスと交す契約の言葉でもあった。

「ち、誓います」

俺は、集まってくれた大勢の友人や親戚の前で、結婚式の予行演習のような幼馴染との契約の儀式に、少し照れくさい気分になった。緊張のあまりに上擦った俺の誓いは、滑稽だったようで会場にいる友人が「本当に誓えるのか？」と、からかったりした。

「ち、誓いますよ、本当に誓いますから、神父様、契約を続けてください」

守りし者フェルミ・A r・オシリス、汝は求める者アルフレッド・S W・ライダーのこと、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、

真心を尽くすことを誓いますか？

「誓います」

フェルミは、背筋を伸ばし凜として俺に忠誠を誓った。浮ついた俺とは、対照的な宣言の唱和に、会場にいる俺の親戚筋が顔を赤らめた。

爵位を持つオシリス家の御令嬢と、鍛冶屋を生業にしてきた我がライダー家の長男には、生まれ育ちの差があるのだ。俺と彼女が不釣り合いなことくらい、ウチの親戚筋も解っていたことだ。

では、誓いのキスを

宣言の続いて、このイベントが控えていたので俺は、先ほどから平常心を保てなかったのだ。

「えーと、どこにキスすれば・・・」

「ここです」

フェルミは、ウェディングドレスを模した純白のドレスの胸元を下げると、あらわになったデコルテ部に人差し指を突き立てた。

鎧属性のフェルミとの契約の刻印は、ふくよかなバストの谷間に描かれていた。無印のペンタグラムは、彼女が清らかな乙女の証であり、未契約の鎧を示す証だ。

「皆が見てるんだから、早く済ませてよ」

「う、うん」

俺は、大勢の列席者に見守られる中、幼馴染の胸元に俺の所有物である証を刻むことになる。初キスとしては、大胆過ぎる場所だ。

chu! smooch!

フェルミのペンタグラムには、光り輝く『Al(alfredo)』が刻印され、その刹那に俺の胸板にも、同様のペンタグラムが描

かれたはずだ。正装で着飾った俺の刻印は、見ることができないものの、焼印を押し付けられたように熱い痛みを感じたので、契約が成功したことが解った。

「い、痛い・・・」

フェルミの口から思わず零れた弱音は、胸の奥をチクリと刺した。彼女も同じ痛みには耐えていると考えると、切ない気分になる。

我、神の名において、剣士アル・S W・ライダーは、守りし鎧の乙女フェルミ・A r・オシリスの正式な所有者と認めます。ご列席の皆様方も、破られぬ契約により、二人の冒険を見守ることを誓います。

神父は、胸を押さえて苦しんでいる俺たちに近付いて、肩を抱いて列席者に拍手を求めた。古い教会の神父にとっては、日常の出来事なのだろうが、契約初体験の俺には、流れ作業の様な儀式が見世物みたいで気に食わなかった。

「なあフェルミ、こんな恥かしいのなら、二人だけで契約を交せば良かったな？」

俺は、顔を真っ赤にしてうつむいている彼女に、神前式で契約したことを詫びた。そもそも俺は、格式ばった神前契約なんて望んでいなかったのだが、ウチの両親がオシリス家の爵位に配慮して、押し進めた契約式だ。

「ううん、アルのご両親が気を使ってくれた神前契約よ、とても嬉しいわ」

「そ、そうか」

「それに、友達の顔を見てよ」

俺とフェルミが顔を上げると、先ほどまで好奇心目で、契約の刻印を見つめていた友人たちは、立ち上がって拍手で迎えてくれた。

「そうだな、初めての契約なんだから、皆に祝福してもらって、良かったのかもしれないな」

「・・・私は、初めてじゃないよ」

「えっ？」

「これが最初で最後の契約だもん」

※※※

教会の広場では、芝生に白いステージが作られており、一段高い場所に座らされた俺たちは、再び見世物状態にされた。

大人たちは、主役である俺たちと無関係に、社交辞令のようにお互い体に刻まれた刻印を見せ合い、自分たちの冒険談に花を咲かせていた。

「私の両親は、もともと契約者だったのよ」

「フェルミのお父さんは、騎士だったよね・・・お母さんは？」

「お母様の属性は、ランスで刻印が右肩にあるわ」

「ランスか・・・ずいぶん勇ましいお母さんだね」

「アルは、私が武器の方が良かった？」

「フェルミは、性格もお堅いし、鎧の方が似合ってるよ」

「性格がお堅いって、それ褒め言葉かしら」

「鎧なんだからカタイは、褒め言葉だろう」

俺たちの住んでいる世界『ウェディング』では、10歳を過ぎた頃になると、体の何処かに刻印が浮かび上がる。男性は、左右どちらかの手の甲に刻印が浮かび上がるものの、多くの者は、意味を持たない旅人『Tr(Traveler)』の刻印が刻まれる。

そんな刻印には、稀に英雄『He(Hero)』、騎士『Kn(Knight)』、魔法使い『Ma(Magician)』など、街の外に蠢くモンスターたちと戦うために、有効な刻印が刻まれる者がいる。彼らは、人々から契約者と呼ばれ、各々の活躍によって栄誉ある爵位が与えられる。

女性の刻印は、体の何処かに武器や防具を意味するペンタグラムが浮かび上がる。先ほどフェルミの母親が右肩に現れた刻印が『ランス』を意味していたように、胸元の刻印が『鎧』などが、その例えだ。女性の刻印には、男性の『Tr』に当る凡庸なる刻印が存在

しないと考えられている反面、男性の刻印が生涯消えないのに対して、女性の刻印には色々な制約があった。

例えば母親になったときは、刻印が消え去ってしまい、その効果を永久に失うことになる。フェルミの母親が「ランスだった」と過去形で紹介されたり、契約式に参加している大人たちが、過去の冒険談に花を咲かせているのは、そのためである。

もう一つの大きな制約は、契約者の男性の『死』が、武器であり防具である彼女たちの『死』を意味することだ。彼女たちの『死』が、契約者の『死』を意味しないことから、非常に理不尽な制約だが、それでも多くの未婚の女性たちは、長い人生に一度くらい契約者との冒険を望んでいた。

※※※

「フェルミとの契約は、俺にとって大金星なんだけど、本当に俺で良かったのか？」

「・・・なんで、そんなこと聞くの？」

「剣士の刻印『S w (S word sman)』は、義父おとうさんのように『騎士』でもなければ、まして『英雄』でもない。フェルミのような優秀な『鎧』を身に付けるほど、価値のある刻印じゃないだろう？」

俺のミドルネーム『S w』は、剣士の刻印を持つ契約者を現していた。

「クラスには、確かに英雄や騎士の刻印を持つ男の子もいたけど・・・汗臭い男の子の『鎧』なんて、想像できる？」

「あっ、なるほど・・・けど、俺も年中サウナ状態の鍛冶屋の息子だし、汗臭いと思うよ」

「アルは、小さい頃からの友達だし、ちょっとなら我慢できるよ」今日の俺は、風呂にも浸かって正装もしており、小奇麗な格好をしているが、普段の俺は、けて風呂好きの綺麗好きというわけではなかった。同級生に先んじて希少な『鎧』を手に来たので、彼女の「契約してください」との申し出を断る理由は、見当たらない

った。

さて、お集まりの皆さんご注目ください。この度、晴れて冒険の旅に出ることになりました、若い二人の門出に際して、ここで初となる共同作業を行って頂きます。カメラをお持ちの方は、檀上の傍に寄って頂いても、結構でございます。

司会を務めていた俺の親戚は、当事者の許可も取らずに、冷やかに半分の友人をステージの前に整列させた。

「キスしろ！ キスしろ！ キスしろ！――」

会場の誰ともなく音頭を取って、キスコールが沸き起こった。奴らの目当ては、フェルミを『鎧』に精製する一瞬、衣服が透けて素肌を晒す、そのタイミングをカメラに収めることだ。

俺は、フェルミを皆の視線から避けるように、後ろに隠してから、彼女の胸の刻印にキスをした。

胸の刻印は、焼けるような痛痒さと、鉄が焼け焦げるような匂いがした。

「オヤジの鍛冶場も、似たような匂いがしたっけ」

フェルミのペンタグラムに描かれた『A1』が輝いて、衣類が透けて虚空に消えた。最初の精製は、身を引き裂かれる痛みを伴うと聞いたことがあったが、彼女の苦痛に歪む表情を見ると、俺の痛みなんて、大したことが無い我慢できる。

「い、痛い・・・はじめてが、こんなに痛いなんて、誰も教えてくれなかったよ」

フェルミの体が完全に消えて、代わりに俺の正装の上に現れた『純白の鎧』は、まるで騎士物語に出てくる勇者の装いだった。

「これは、見事な『鎧』ですなあ・・・さすがオシリス家の御令嬢だ」

鑑定士の刻印『Ju (Judgment)』を持つ初老の男は、彼女の父親が招いた古い友人だ。

「いえいえ、まだ見かけ倒しの子供ですよ」

「どれ、私が鑑定してみましよう」

鑑定士は、鎧を身に付けた俺の傍まで来ると、手に持った杖を振り上げて「仕えし契約者との命約、守りし者の力を我に示せ・・・」と、呪文を唱えた。彼ら鑑定士は、魔法使いのなりそこないだと、聞いたことがあった。

「私の見立て通り、とても優秀な『鎧』ですぞ。魔法耐性がトップクラスで、火、風、水、土の全攻撃耐性も付いている。毒と麻痺の無効化は、冒険の心強い友となりましよう」

「ふむふむ娘の頑固なところは、『鎧』になっても相変わらずだな」娘を褒められたオシリス卿は、機嫌を良くして口髭を撫で回していた。

「なあフェルミは、凄い『鎧』らしいよ」

俺は、自分の胸元に話しかけた。

「うん・・・私は、凄い『鎧』だって言ったでしょう」

「そういえば、言ってたね」

「私、重くない？」

「いいや、重たくないよ」

剣士の俺に不釣り合いな重厚な『鎧』は、たぶん騎士の血統によるものだろう。本来、軽装備で戦うことを得意とする剣士には、不釣り合いな気がした。

「本当に？」

「本当だよ」

「本当に、重くない？」

「そうだな、もう少しダイエットした方がいいかも・・・」

「重いじゃん！ 私のこと重いと思ってるじゃん！」

だって、何度も確認するから「重い」と答えてほしいのかと思ったんだよ。

※※※

冒険に旅立つことを躊躇っていた俺も、これだけ盛大な契約の儀

式を執り行ったのだから、今さら旅立たない言い訳も出来なくなつた。

フェルミが盛大な契約式に応じた理由は、俺の背中を押すためだったのかなと、彼女の心情を勘ぐったりしたけれど、もう引き返せない後の祭りだ。

「俺たちの冒険の目的は、自分探しってことでいいよね？」

「駄目です、却下です。男の子なら、もっと大きな目標を持ってください」

「ならば、隣町に薬草を買いに行こう」

「それも却下です」

「フェルミが俺と契約した目的は、いったい何なのよ」

「魔王を倒して、世に名声をあらわすためです」

「えええ！　魔王討伐が目的なら英雄とか、騎士とか、もっと適職の契約者を探せば良かったじゃないか」

「それでは、彼らの手柄になってしまいうでしょう？」

「それって・・・」

「一介の剣士アルが魔王を討伐すれば、私（鎧）が優秀だったお蔭として、私の名声が後の世まで語り継がれましょう」

やはりフェルミは、騎士の娘だと再認識させられた。

私と契約してください（後書き）

面白そうだなとか、続き読みたいな〜って方は、迷わず『読了』で報告してください^^

私が守ってあげます

「フェルミ・・・悪いけど、少しだけ解除しても良いかい？」

剣士の俺には、やはり軽装備がお似合いだったようで、『鎧』の重量に力負けしていた。

「駄目です・・・もう少しですから、このまま頑張ってください」

「駄目、駄目って言っても・・・フェルミだって、息が上がっているじゃないか・・・本当は、もう我慢も限界なんだろう？」

『鎧』となっているフェルミとは、『死』と同じように『体力』

も共有しており、俺の足に貯まった乳酸の影響で、下半身辺りの感覚が馬鹿になっているはずだ。

「そ、そんなことないです・・・もう少しだけなら」

「我慢するなよ・・・フェルミ、もう良いだろう？」

「もう少ししたら、気持ち良くなるかも・・・んっ」

「あっ！・・・もう駄目かも・・・もう出ちゃうよ」

俺は、急な斜面に片膝をついて立ち止まると、体を前に倒して『鎧』を解除してしまった。ペンタグラムが輝くと同時に、俺の上半身からヌウーと、フェルミの体が出てきた。

「バカ！ バカ！ バカ！ もう少しでイケたのに」

急に解除された彼女は、俺と向き合う形で抱っこされている。彼女は、剣士の俺に合わせて軽装な衣服に身を包んでいたが、その豊かなボディまで軽くなるわけじゃなかった。前屈みに彼女を抱えている体力は、今の俺に残っていないので早く離れてほしかった。

「我慢できなかった俺も悪いけど、やっぱり無理があるよ」

「却下です。私は、アルが耐えてくれれば、我慢できましたよ」

「ウソだよ、フェルミだって苦しそうな声出してたよ。あはーんとか、うふーんとか、気になって前に進めないよ！」

「わ、私が、そんな妙な喘ぎ声を漏らすはずないでしょう！ な、

なんで私が、アルに抱き着いて、あはーんとか、うふーんとか言うわけ？」

日が暮れて三つの月が地上を照らし出してから、三度目の口喧嘩の理由は、他愛もないことで始まった。フェルミがやらしい声を出すから、俺の気が削がれた？ そんな馬鹿な理由で、『鎧』を解除する訳がない、冗談を言っただけなのに。

俺たちは、初めて冒険に出る若者に必ず課せられる、儀式『First night』に参加していた。半人前のまま冒険者として旅立った若者が、志半ばにモンスターの餌食にならないように、契約者の体力や、武器や装備との相性を再確認するために行われている儀式だ。

街から一番近い神殿までの道程には、冒険初心者の若者が戦うのに、丁度良い加減のモンスターが生息している。神殿までに夕刻から翌日の日の出まで、辿り着ければ儀式が終了して、晴れて一人前の冒険者として、旅立つことが許されるのだ。

儀式は、一回で突破できる者もいれば、何度やっても失敗に終わる者もいる。ただ三回以上失敗した冒険者は、大抵の場合、装備側から契約者に解除（三行半）を突き付けられる。

※※※

「よお、お宅らは、新婚さん（Newlywed）？ 初夜（First night）で喧嘩しているようでは、長い冒険旅行なんて出来ないぞ」

俺たちに話しかけてきたのは、いかにもベテランの弓使い（Archer）だった。長身の男は、作られた軽装備で身を固めていたが、深い緑の『弓』と、青白く光る『籠手』は、契約で得た武器と防具に間違いなかった。俺たちは、お互いの自己紹介を簡単に済ませた。弓使いの男は、エラハイ・Arc・ヒットマンと名乗った。

「俺たちは、今日が始めての儀式なんですよ」

「ウチは、この娘『弓』との契約を済ませたばかりでね、初夜に参

加するのは、三度目なんだよ」

「へえ、装備を変える度に、儀式に参加するんですか？」

俺は、無知をひけらかしてしまったようで、フェルミは「この剣士は、常識を知らないのよ」と、慌てて俺の口を塞いだ。鍛冶屋を継ぐつもりだった俺は、冒険関連の授業なんて、昼寝の時間だと思っていたし、今現在をもっても、あまり前向きな気持ちではない。

「いいんだよ、知らないことを尋ねるのも、冒険者に必要なことだよ。それよりも、彼女を紹介しておくれよ？」

エラハイは、俺に寄り添って警戒しているフェルミを指差した。

「彼女は・・・」

フェルミは、俺の『幼馴染』？ 『鎧』？ 『恋人』？ たぶん

『恋人』だと紹介したら、彼女の正拳突きが飛んできそうだ。『鎧』だと紹介するのは、彼女を物扱いしているみたいで気が引ける。

「私は、剣士アルの『鎧』です。通り名は『オシリスの完全拒絶』です」

俺は、フェルミに通り名があることを初めて知った。

「うん？ オシリス卿の娘なら、軽装備じゃないのか・・・それは、残念だった」

「そちらも、名乗るのが礼儀です」

「そうですか、永久爵位を持つオシリス卿のお嬢さん・・・いいでしょう」

エラハイは、両手を前に向けると、その先にぶら下がる女の子が出てきた。

「『籠手』のエイミーです。特技は、攻守ともに吸血効果（Suck blood）を付加できます」

次にエラハイは、右手で弓を高く上げると、その手に巻き付いた状態で幼い女の子が出てきた。

「こんばんわ・・・『弓』のユングです。えーと、特技は、まだ在

りません」

お姉さんタイプのエイミーに比べると、ユングは、まだ成人前（16歳）の子供に見える。

「エラハイさん、その二人とも素敵な装備ですね」

「アルは、気が付かないの？ その『弓』は、まだ成人してないじゃない！ 成人前の女性と契約するのは、『ウェディング契約の書』青少年保護育成条項に違反してるわ！」

フェルミは、ユングを指差すと契約者であるエラハイを強く非難した。

「オシリスのお嬢さん、ウチは、大人の女性を愛せないんですよ。文句があるのなら、儀式が終わって一人前の冒険者になってから、意見することだな」

エラハイは、ユングのうなじに描かれたペンダグラムにキスをすると、彼女は、痛みをかみ殺す仕草で『弓』に姿を変えた。俺は、契約の痛みを思い出して、思わず自分のうなじを隠してしまった。

「あ、貴方は、変態さんですわ。子供に、あんな痛みを強要するなんて・・・」

珍しくフェルミは、感情を高ぶらせている。

「初夜で喧嘩している新婚さんには、俺と所有物の関係に、口出してほしくないね」

「坊やたちは、ほっておいて先を急ぎましょう」

エイミーの組んで腕の上下には、やはりペンダグラムが描かれていた。

「ああ、俺の可愛いエイミー・・・坊やたちには、契約者の愛の形が歪んで見えるらしい」

エラハイは、彼女のペンタグラムに舌を這わせると、青白い炎に包まれた彼女が、艶かしい叫び声をあげて、業火に焼かれる様に身をクネらせると『籠手』に姿を変えた。

「今のは、なんか素敵だ・・・」

俺は、エイミーの妖艶な契約に魅了されてしまった。

「本来ならば、少年から、『鎧』を取り上げたいところだが、お宅らの様子なら、わざわざ取り上げる必要もないだろう。お宅らは、今から街に戻って、儀式をリタイヤするんだな。ここから先は、神殿までモンスターの生息地になる」

エラハイは、街の方向を指差すと、微かに街明かりが確認できた。俺たちは、日の沈む前から、たくさん歩いたのに、まだ近くに街明かりが見えたことに、落胆してしまった。

「あ、あのエラハイさん・・・色々と教えてくれて、有難うございます」

俺は、彼にお礼を伝えると、フェルミが金切り声で「なんで！有難うなの！」と、ヒステリックに怒鳴っていた。

「少年は、良い冒険者になるだろう、お嬢ちゃんは、もう少し分を弁えないと、少年に捨てられるぞ」

エラハイは、弓使いらしく颯爽と暗がり消えて行った。

※※※

「なんで！ アルは、あんな変態さんに、有難うとか頭下げてるのよ」

「俺たち二人とも春生まれだから、同級生の中で初めての冒険者だろう？」

「だから？」

「他人の契約を見たことなかったから、すごく参考になった」

「はあ？」

「何だかんだ言っても最後は、俺たちのこと気にかけてくれてたじゃん」

俺は、エラハイとエイミーの契約を思い出すと、ちょっと羨ましく感じた。彼らの契約に比べれば、俺とフェルミの契約なんて、子供のお遊びだ。

「彼は、同じ軽装備が適職の剣士から、仕える装備を奪おうと近付

いてきたのよ」

「えっ、エラハイは、盗賊だったの？」

「アルは、彼の何を観察してたのよ？」

「えーと、契約方法がカッコイイなど」

フェルミは、顔を手で覆い隠すと、情けないと言わんばかりの大きな溜息を吐いた。

「カッコイイとか言ってる場合？ 私たちは、まだ痛みにも耐える段階でしょう？」

「けど、ベテランのエイミーだって、痛そうにしていたし、抑えられない痛みなら、もっと楽な契約姿勢を考えるとかさあ、楽しみを見つけてもいいじゃん」

「例えば・・・どんなポーズよ」

フェルミは、俺の力説に話を聞く耳を貸してくれた。ちなみに今の契約方法は、胸を肌蹴た棒立ちの彼女に、俺が申し訳ない顔をして刻印にキスをしている。解除方法は、前述のとおり彼女を向き合った形で抱っこしている・・・そうだな、駄弁売りと駄弁みたいな格好だ。あれが、じつに情けない格好で、知り合いの前で解除した日には、三日ぐらい立ち直れない。

「エラハイは、なんか格好良く二人を出し入れしてたよ」

「私たちも経験を積みば、出し入れも様になるわよ」

「そうかな？」

「あのね、あの娘たちの刻印は、腕とか、うなじなのよ・・・私の刻印は、そ、そのオッパイでしょう・・・比べるまでもなく、私たちの勝ちじゃない」

「フェルミだって拘る部分があるじゃないか？」

「・・・『鎧』として誇りはあります」

「そろそろ疲れも取れたし、練習を兼ねて契約しようか？」

と、俺は言うど、フェルミを右手で抱きかかえて、左手を天高く

伸ばした。

「我は汝の契約者にして、誓いを守る者アルフレッド、神の名において……」

「ちょ、ちょっと、その呪文みたいな詠唱は、いったい何なの？それと左手を突き上げている理由を説明しなさいよ」

俺たちの契約に呪文が要らないのは、エラハイたちの契約を見ていれば、理解できたと思う。

「だから、雰囲気作りだよ」

「格好悪いし、笑っちゃうから却下です」

では、改めて右手で抱き寄せた後、左手でフェルミの顔を支えた。俺は、彼女の喉元に舌を這わせると、胸元の刻印に向かって白い肌を舐めた。

「ちょ、ちょっと、くすぐったいから止めてよ」

「エラハイだって、エイミー腕を舐めてたじゃん！ 少しぐらい、くすぐったいのは、慣れれば気持ち良いから我慢しなよ」

「駄目です。友達に見られたら、私が欲求不満だと思われちゃう」
フェルミには、エラハイの契約をパクるのを禁止された。

仕方がないので、支える仕草からやり直すと、少し乱暴に彼女の襟元を引き下げた。

「出ですよ！ オシリスの完全拒絶！」

鉄の焼ける匂いと焼ける痛みは、ちっとも緩和されなかったが、契約時に叫ぶのは、痛みを紛らわすのに効果的だった。それに夜闇のせいなのか、いつもより白炎が倍以上立ち上がった気がする。

「今のは、成功じゃないかな？」

純白の鎧は、相変わらず重たかったけれど、格好良く契約出来た俺は、このまま神殿までイける気がした。

「……」

「フェルミ、どうしたの？」

「乱暴に服を下げないでよ、オッパイが見えたので、却下です」

「ええー、一連の動きがカッコイイのに」

「アルの格好付けたい気持ちは、理解できるけど、私たちのやるべきことは、もっと沢山あるでしょう？」

「解ったよ、衣服を肌蹴るのは、フェルミの仕事で良いよ・・・」

「解ってくれば、いいです。私たちも神殿に向かいましょう」

※※※

フェルミに尻を叩かれた俺は、腰に携えた既製品の剣に手をかけて、コンパスを確認した。

「赤い月を目指して歩けば、神殿に辿り着けるはずだ」

一步を踏み出した俺は、街を出てくるときのオヤジの忠告を思い出した。雑魚のモンスターは、仲間を集めて狩りをするから、森で長い時間足を止めれば、奴らに囲まれてしまう。迂闊だった。

体毛に覆われたモンスターは、身長二メートルくらいで、大小様々な木の棒を持っていた。数は・・・先頭に三匹、後方にも何匹か気配がした。

「まいったな・・・」

俺が剣を鞘から抜くとフェルミは、柄つかしか見えないので驚いたようだ。

「その剣は、なんで柄しかないの？」

「この剣・・・疾風シルフィーネ零式の棒ぼう樋ひは、不可視魔法で見えないんだ。ウチの鍛冶屋で一番トリッキーな剣を頂戴してきたんだぜ」

刃長二・五メートルの疾風シルフィーネ零式が、なんで七十センチの鞘に納まっているのかなど疑問は、尽きないけれど、その辺も含めて相手の虚を突く、真正正銘の魔剣ってやつだ。

飛びかかってくる猿どもは、俺の間合いに入った瞬間にぶった切ってやるぜ！

「アルのこと、私が守ってあげます・・・」

フェルミの声は、少し震えていた。初めての实战だ、怯えるのも無理はない。

「頼んだぜ・・・」

剣士の俺の声も、震えていただろう。けどな、俺の震えは、武者震いってやつだけだな！

奇跡のカーニバルの開幕だ！

私が守ってあげます（後書き）

感想や読了宣言頂けると嬉しいです^^

私なら大丈夫です

疾風シルフィーネ零式の不可視には、相手に間合いを計らせない、奇襲攻撃に長けているなど利点があるものの、高難度の剣捌きが必要される曲者だ。

刃長二・五メートルを自由自在に扱うには、見えない切先の風切音を頼りに、軌道を敵に向けて戦うのだが、熟練の剣士でも自分を切り裂くこともある。

「疾風の名前が示すとおり、風を操り敵を切り裂く魔剣だ」

先頭にいた三匹のうち、真ん中の一番長い木の棒を持ったモンスターが、ゆっくりと近付いてきた。

「アル・・・あのモンスターは、リーフ・オークだわ」

リーフ・オークは、最低3匹で行動しており、冒険者を2、3集団が協力して襲い掛かってくる。知能は、五歳児並みだと言われているが、戦闘に際して当てになる情報じゃなかった。

「なんでリーフ（葉っぱ）なんだ？」

「彼らの主食は、葉っぱだからよ」

リーダー格と思われる一歩踏み出したリーフ・オークは、体毛を掻き分けてギョロリとした目を向けた。白目のない瞳は、獣特有の鈍い輝きを放ち、突き出した顎から零れ落ちる唾液は、草食のモンスターと思えなかった。

俺は、リーダー格のリーフ・オークの足元に切先を忍ばすと、漁師の一本釣りが如く、股の間から脳天まで一気に切り裂いた。

「悪く思ふなよ、子豚ちゃん！」

と、ここまでは、計画通りだったのだが、振り上げた剣は、勢い余って俺の背中をガツンッと叩いた。

「んっ！」

フェルミが衝撃に驚いたのか、小さな呻き声をあげた。

もしも疾風シルフィーネ零式が片刃でなかったら、フェルミの『鎧』に大きな傷跡を残すところだった。

「す、すまない！」

リーダー格を失ったリーフ・オークたちは、ブイヒイブイヒイと豚のような鳴き声をあげると、後退りするように森の闇に消えた。

圧倒的な戦力差を見せつけられた奴らは、俺たちに恐れをなして敗走したのだ。

※※※

「さっき背中に剣当てて・・・ごめんな」

俺は、初のモンスター退治が成功すると、奴らの右手から小指を切り落として、懐に入れてあった小瓶に詰めた。

冒険者たちは、モンスター退治を行った証拠に、教会に決められた戦利品（部位）を街に持ち帰り、その教会で換金をして生計を立てている。

先ほど退治したオーク系の戦利品は、右手の小指だった。

「ねえアル、その剣だけど、ちゃんと使えるの？ もっと自分に合った剣で、戦った方が良くないかしら？」

疾風シルフィーネ零式は、先ほどの戦いで初めて使った。正直に言えば、剣士の俺でさえ、あまりのじゃじゃ馬ぶりに、この剣で戦うのを遠慮したいと思った。

「ウチの鍛冶屋では、一番の業物わざものなんだけど、俺の実力レベルでは、まだ装備できる剣じゃない」

俺は、背中に差していた小太刀を取り出すと、目の前の切株に置いた。

「その剣は？」

「これは、俺に剣士の刻印が現れたとき、オヤジが打ってくれた最初の剣、轟くCWW（Cold winter wind）だよ・
・戦利品を剥ぐのに、持ってきたんだけど、こいつを主要武器メインウェポンに換装しておこう」

「神殿までは、まだ距離があるのよ」

フェルミは、初心者用の剣と聞いて、不安を覚えたようだ。

俺は、疾風シルフィーネ零式を背中差すと、腰のフォルダーに轟くCCWを収めてから立ち上がった。そして体制を低くすると、切株の横にあった若い針葉樹の幹に手を当てて、轟くCCWを鯉口から浮かせた。

フォオオ！と、地を這うような風音がして、針葉樹の幹に左から三本、右から二本の切り傷を付けた。

「もしかして、今五回攻撃したの？ 風音は、一回しか聞えなかったのに？」

「これで安心した？」

「うん、その剣も凄いよ」

「安心したなら、先を急ごう」

フェルミを安心させるために披露した技は、轟くCCWの性能ではなく、剣士のスキル（刻印の力）『剣技ハヤブサ』を発動させたものだった。彼女の前では、剣士のスキルを発動させたことがなかった。剣の性能だと勘違いしてくれた。

フェルミは、俺の腕前を信用していないところがあり、強い装備を持参していると思わせた方が、納得するだろうと思った。

※※※

赤い月が頭上まで昇ると、夜明けまで12時間となった。太陽の周回軌道の真下に近い森では、夜闇が20時間以上続く。太陽が周回軌道？ これは、ウェディングと地球の違いを知らなければ、意味の解らない話だろう。

異世界ウェディングには、大小四つの月があるが、最も大きく二番目に明るいのが赤い月だった。そして特筆すべきは、この赤い月がウェディングの衛星ではなく、赤い月の軌道上にウェディングが存在しており、つまり赤い月は、死滅に近付いた太陽の成れの果と

いうことだ。

では、ウェディングの太陽は？ 夜闇に姿を消している一番明るい衛星が、大地を照らす太陽なのだ。ウェディングの昼夜は、太陽が周回軌道を回る衛星なので、ウェディングの自転速度に比例して一定であり、地方毎に決まっている。

太陽の周回軌道から離れるほど、昼が長く夜が短い、周回軌道の直下では、昼と夜の比率が同じである。それが人々の生活だけでなく、夜闇を好むモンスターの生息地も限定していた。

最も長く夜闇に包まれる太陽の周回軌道の直下は、モンスターを支配する魔王の土地『Land of Adventure』となっており、南半球には、俺たちが住んでいるサウスフィア王国がある。冒険者たちの究極の目的は、魔王を討伐して、北半球を含めた地上の覇権を手にするのだ。

もちろん北半球にも人間が住んでいるが、小国同士の戦争が絶えない北半球には、魔王の土地に挑むような冒険者がいない……らしい。

契約者や装備となってモンスターと戦う冒険者は、『Land of Adventure』でモンスターを退治して、人間の住める安全な土地を開拓すること、北半球に住んでいる人々と商業的交流を絶やさぬこと、その他様々な目的で冒険の旅に出ている。

※※※

俺たちは、あれから一匹もモンスターに出会うことなく、神殿が見えるところまでたどり着いた。

「神殿までの距離も残すところ、あと数キロだな……ふう」
現金なもので、少し前までフェルミの『鎧』が重いと文句を言っていたのに、神殿が見えた途端、足取りが軽くなった。

「冒険者に守られた街の近くの森だから、モンスターの生息数も少ないと思うけど、『初夜』にしては、手応えがないわね」

フェルミの言うとおり、ただ神殿に向かって歩くだけなら、毎年リタイヤする者が出るはずがなかった。確かに、手応えがなさ過ぎ

だ。

「このままゴールすることも出来るけど、それで「明日から冒険者です」と言われても、ピンと来ないね」

俺は、儀式の意味について考えた。

このまま儀式が終了しても、冒険者として旅立つ心構えが身に付くだろうか？ 彼女を上手く使いこなしていけるだろうか？ それらを試されるのが『初夜』だとすれば、俺たちの旅路は、口喧嘩とオーク一匹倒しただけに過ぎない。

「リーフ・オークの戦利品を増やさない？」

このまま終わりたくない、フェルミも俺と同じことを考えていたのだろう。

「戦利品一個では、騎士のプライドが許さないのかい」

「それもあるけど、せっかくだから私たちの力を試みましょうよ」

俺は、足の疲れを取るために、ちょうど休憩したかった。先ほどのオーク程度なら、轟くCCWでも剣士のスキルを発動すれば、十分に戦えるだろう。

「ここで火を起こして休憩すれば、またリーフ・オークが現れるに違いない」

俺は、足元に堆積していた枯葉を足で掻き集めると、その中小枝を拾い集めて、枯葉の上に井形を組んだ。そこに襟元から取り出したマツチ擦って放り込むと、火が次第に大きくなった。

「あら、ずいぶんと手際が良いのね」

「剣技の修行で森には、オヤジとよく来ていたからね」

「ちゃんと、修行してたのですね」

「刻印が浮かんだ頃は、頑張ってたんだ。俺にも、人並みの才能があったんだと・・・」

ウチは、代々鍛冶屋の刻印『Blacksmith』を受け継いでおり、俺にも『Tr』か『Black』の刻印が浮かぶと

思っていた。

たぶん剣士の刻印は、右掌にペンタグラムが描かれていた母親の血筋なのだろう。本来は、男性の血統が受け継がれるが、稀に母親の血統を継ぐ者が生まれる。ただし、母親の影響を受けた契約者は、刻印の力を上手く扱えないと、教会の研究者が言っていた。

フェルミが優秀な鎧なのは、何世代も続くオシリスの『騎士』の血脈で、刻印の力が洗練されたからだ。

「人並みの才能では、私が困ります」

「フェルミは、魔王を討伐して名を挙げるんだもんね」

「そ、そうですね・・・私が認めたアルは、そんな弱音を吐いたら駄目です」

「解ったよ」

俺は、自分の体を抱きしめた。

冷たいはずの純白の鎧は、焚火のせいで人肌の温もりに感じた。

「ちょ、ちょっと、恥かしいから・・・」

照れるフェルミは、すごく可愛いと思った。

人間の彼女を抱きしめたら、強い口調で拒絶するだろうが、今は『鎧』だから離れられない。

「少しでもいいから、抱きしめていたいんだ」

「少しでもですよ・・・せっかくの純白の鎧が、汚れちゃうから」

「少しでも黙ってよ」

俺は、何時間でも自分を抱きしめていたかった。

ペキッ

そろそろ良い感じに、雑魚モンスターどもが集まってきた。木々の暗がりには、赤い月を反射した瞳が、何個も浮かび上がっている。リーフ・オークは、なかなか暗闇から姿を現さなかった。たぶん

先刻の敗走したオークたちが、さらに多くの集団を率いて戻ってきたんだろう。今度は、用心深くこちらの出方を探っているのだ。

「五歳児にしては、知恵があり過ぎるだろう」

「・・・」

俺は、やつらの背後に、鏃^{やじり}がキラリと光るのを確認した。

「アーチャ・オークは、鉄の鏃を扱えるのか？」

「・・・」

「フェルミ？」

「・・・なに、もういいの？」

フェルミは、ウツトリした声で答えた。

「一斉掃射されたら、防ぎきれないかも」

俺は、立ち上がると、轟くCCWを中腰で構えて、弓矢を叩き落とすつもりで、アーチャ・オークの攻撃に備えた。

「アーチャ・オークは、たぶん石の鏃のはずだけど・・・鉄の鏃ならゴブリン系のモンスターかしら」

「オークとゴブリンの混合パーティ、ずいぶんと厄介な組み合わせだな」

俺は、摺り足で敵との間合いを詰めながら、『剣技ハヤブサ』を繰り出すタイミングを図っていた。

木々から先兵と思われる、一回り小型のオークが顔を覗かせたが、その面構えに見覚えがあった。やはり先刻の敗走したオークの集団だった。

ブオオオオ！ 轟く風音とともに先兵の顔を切裂くと、純白の鎧が返り血に染まった。

「ごめん、フェルミのこと血で汚しちゃった」

「いいの気にしないで、初夜^{はつしや}って、そういうものでしょう？」

オークの返り血は、鎧に付着することなく、鮮血のまま俺の太腿の付け根に流れ落ちた。こんなことなら、布のパンツではなく、多少の重量負担を無視して、皮のパンツを装備してくれば良かった。下着が血に塗れて、下半身が気持ちが悪い。

「今夜は、ブヒブヒ言わせてやるからな！」

俺は、オークどもの隠れ潜んでいる暗闇に飛び込むと、特攻に驚いたやつらは、ブイヒイブイヒイブイと鼻を鳴らして、月明かりの元に逃げ出した。

俺は、無我夢中で『剣技ハヤブサ』を発動させたが、さすがに五匹からの剣速は、ハヤブサと呼ぶに相応しくないほど遅くなった。「フェルミ……五匹倒したわけだが、まだ戦利品が必要かい？」

俺は、戦線離脱を提案したが、オークたちの血を浴びた『鎧』は、俺に敗走を許さなかった。

「いま戦いを止めるなんて許さないんだから、もっと大勢のモンスターを殺^やりたいわ」

契約した装備は、戦闘により能力を开花させ、より多くのモンスターを相手にすることで覚醒する。オークとの戦闘において強い快感を得るのは、フェルミが優秀な証拠だ。

俺は、彼女に促されるまま、さらに五匹のオークの首を撥ねると、血が雨のように頭上から降り注いだ。

「ああ、アル……私、体が芯まで火照ってきたわ」

モンスターの血を浴びながら快感を得る幼馴染なんて、想像するだけで、俺の意識も持って行かれそうだ。

「あは〜んっ」

「なんだよ！ あは〜ん、うふ〜んって言うじゃねえか！」

と、俺がフェルミの喘ぎ声に気を取られた瞬間、背後からゴブリンの弓矢が飛んできた。二本は、叩き落としたが、三本目は、右脇腹に突き刺さった。

「ひい！」

フェルミは、苦痛に満ちた短い叫び声をあげると、息遣いが荒くなった。俺は、矢が飛んできた方向に、切り落としたオークの首を投げつけると、ゴ布林たちは、ザワザワと相談して敗走を決めた

ようだ。

「だ、大丈夫か？」

『鎧』のおかげで俺まで貫通することは、なかったものの、フェルミのことが気がかりだ。彼女は、相変わらず荒い息遣いで、何も返答してくれない。

俺が『鎧』を解除すると、汗だくのフェルミを正面から抱きかかえた。彼女の右脇腹を確認した俺は、怪我一つなかったことに安堵した。

「外傷は見当たらないけど、大丈夫なのか？ 痛くなかったか？」
「すごく、きもち・かった・・・」

「気分が悪いのか？ 気持ちが悪かったのなら、吐いてもいいぞ」
俺は、フェルミを地面に寝かせると、水筒の水を飲ませてやった。
「アル・・・死にそうよ・・・手を繋いで・・・」

「矢が当たったくらいで、契約の『鎧』が壊れちゃうの？」
俺が手を繋いでやると、彼女は、首を大きく振った。
「私なら大丈夫です・・・戦闘が、すごく気持ち良くなって・・・」
「だって、死んじゃうって？」

フェルミは、上半身を起こして俺を正面に見据えた。

「死にそうなくらい、気持ち良かったのです」

彼女は、上気して顔を真っ赤にした。

俺たちは、月明かりの中で大きな声で笑った。

俺たちは、オークから得た十一個の戦利品を小瓶に詰めると、二人で手を繋いで神殿に向かった。

私なら大丈夫です（後書き）

ドキドキのバトル描写に仕上がったと思います。反則気味ですが^^;

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9141x/>

へっぽこ剣士の俺が、チートな彼女を装備する

2011年10月26日14時08分発行